T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	学士課程初年次学生 Engagement 研究展望の試み
著者	伊東幸子
出典	初年次教育学会第11回大会発表要旨集,
発行日	2018, 9

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

学士課程初年次学生 Engagement 研究展望の試み

［1 行あける］

伊東幸子（東京工業大学　学生支援センター）

［2 行あける］

１．はじめに

本稿では、2008 年～2018 年に刊行された 17 本の英語論文[i]を対象とし、アウトカムに替わる高等教育の指標の候補として国内でも注目されつつある（e.g.山田 2018,相原 2015, 小方 2008）学生エンゲージメント概念のうち、特に学士課程初年次学生のエンゲージメント(first- year student engagement)を扱う研究の体系的な展望を試みる。

２．研究タイプ別の展望

１）初年次学生エンゲージメント測定尺度

Krause and Coates_2008 は、オーストラリアの 13 公立大学学生への質問紙調査（FYEQ:First year experience questionare, 回答 3542）の因子分析から、初年次学生エンゲージメントを 7 下位次元構造とした。[ii]高校から大学への移行、スタッフとの関係、教室外活動、オンライン活動に関する次元を含み初年次学生が関与すべき領域をより包括的にとらえることを目的としている。

２）エンゲージメントが中間変数、被説明変数の研究群

定性 15 本のうち 11 本が学生エンゲージメントを被説明変数、中間変数とするモデルを構築し、うち 2 本が Krause and Coates_2008 の尺度を活用している。

Xerri et al._2018 は、（教員-学生の関係）×目的意識を持つことが、学業の負担感を減らすことを通じて学生エンゲージメントにプラスで有意の影響を持つとした。学生エンゲージメントが GPA、学業継続率などのアウトカム指標と関係があることは既に多くの研究蓄積がある。近年の研究は、将来的に多くの果実を生む学生エンゲージメントについて、その規定要因の詳細なメカニズムを明らかにしようとしている。

Lanassa et al._2007 は、多くの初年次研究の中で移行のために有効とされている学生寮について、寮の新設が学生のエンゲージメントに影響を及ぼさなかったとしている。関係者が生活を共にすることの効果という観点では、Walsh et al._2014 は、宿泊を伴うフィールドワーク授業を経験した学生は、ピア、学生-スタッフ次元のエンゲージメントが有意に高いとしている。共同生活やそのための寮は、学生-教職員、学生同士がより多く、密接に交流できるという本来のプラス要因の代理変数でしかないこと意味すると考えられる。寮だけを作り、本来重要な寮の中での交流を促進する仕掛けを作らなければ効果がなく、一方で寮というハードウエアがなくても交流が多い宿泊授業はエンゲージメント向上に効果があるのだろう。

同様のことが、授業へのオンラインツール活用についてもいえる。Inquiry based オンラインツールの授業への導入効果を議論した 2 論文の結論は異なる。オンラインツールに提示する課題の中身について主に議論する Oliver_2008 によれば、授業前後で学生の engagement は想定ほど向上しない。一方で、Moor and Gilmartin_2010 は、オンラインツールの活用により、学生、ピア、チューター、スタッフの交流を促進させることが重要だとし、学生がこの交流を促進する役割を果たせることが、同一内容でオンラインツールを活用しない授業と比較して、学生の成績、エンゲージメント向上に有効になる要因としている。

３）エンゲージメントが説明変数の研究群

Kuh et al._2008 は、学生エンゲージメントが GPA、学業継続にプラスの影響を及ぼす研究群の先駆けである。教育的に意義がある活動は両方に影響し、加えて GPA には学習時間、学業継続には Co-curricular 活動が影響を及ぼす。Lizzio et al_2013 は、試験、研究室レポート、エッセイという異なったアウトカム(学生の知覚)に対して、学生エンゲージメントは試験と研究室レポートには影響があるがエッセイには影響がないとした。An_2015 は、Dual enrollment(高校時代に大学の単位を取得すること)が、エンゲージメント、モチベーションを介しておよび直接、大学入学後初年次春学期の GPA に対する影響を与えるとしている。

３．まとめ

１）依拠する理論

今回レビューした１７本は全体として、学生と教職員、学生間の交流の質および量が学生を育てることに良い影響を持つとしている。依拠する理論として複数の論文で、定番の学生 engagement の理論的背景に加えて、実践共同体の理論に言及されている。

（community of practice,Wenger_1998）

２）今後の研究

汎用的な測定尺度による定量研究の蓄積が進めば、理論への貢献のみならず、初年次セミナー、各種の授業、オリエンテーション、アカデミックアドバイジング等の実践者が実践効果を客観的に確認する有益なツールになるだろう。同一機関内での経年比較、海外を含めた他大学の実践との比較を視野に入れることも可能になる。

今回レビューの対象に定性研究は 2 本と少なかった。Christie et al._2016 は、Academic literacy を身に付けることと critical reflection により、1 年次に苦労していた学生達が、3,4 年次には「学修者としてのアイデンティティ」を身に付けていく様子を聴き取りから明らかにしている。

「学生の心に火が付く瞬間」を含む、大学生（学修者）としてのアイデンティティが確立されていくプロセスを複数学生から卒業までの長期的なスパンで丁寧に聴き取りをしていく研究は、定量研究が依拠するモデルへの示唆という観点でも、今後重要になるだろう。

４．主な参考文献（紙面の関係で英語のみ）

An, B. P. (2015). The role of academic motivation and engagement on the relationship between dual enrollment and academic performance. *The Journal of Higher Education*, *86*(1), 98-126.

Krause, K. L., & Coates, H. (2008). Students' engagement in first‐year university. *Assessment & Evaluation in Higher Education*, *33*(5), 493-505.

Kuh, G. D., Cruce, T. M., Shoup, R., Kinzie, J., & Gonyea, R. M. (2008). Unmasking the effects of student engagement on first-year college grades and persistence. *The journal of higher education*, *79*(5), 540-563.

LaNasa, S. M., Olson, E., & Alleman, N. (2007). The impact of on-campus student growth on first-year student engagement and success. *Research in Higher Education*, *48*(8), 941-966.

Moore, N., & Gilmartin, M. (2010). Teaching for better learning: A blended learning pilot project with first-year geography undergraduates. *Journal of Geography in Higher Education*, *34*(3), 327-344.

---

[i] EBSCOhost データベース Teacher Reference Center で、「first-year student engagement,雑誌名 higher education」の検索条件で論文を検索、ヒットした論文の中からランダムに 17 本を選択。

[ii] Transition Engagement Scale (TES), Academic Engagement Scale (AES), Peer E ngagement Scale(PES),Student-staff Engagement Scale (SES), Intellectual Engagement Scale (IES),Online Engagement Scale (OES) and Beyond-class Engagement Scale (BES).